



言葉

ことば

岸 恵子

きし けいこ

言葉というものは不思議な生きもので、時代によって大きく変化するし、使う人によっては正しくいねいな言い廻しをしているのに、なんとなく下品な卑しさを感じることもある。逆にかなり乱暴な言葉を連ねているのに、そこに或るリズムやユーモアがあると聴く人に清々しいところよさを与えたりもする。こんなことを言うのは、私が女優であり、物を書く人間であるからかも知れない。

とは言え、これはあくまでも自国語をあやつる時のみの贅沢な願望であり、外国語となると、あやつるなどという思いあがりも尻つぼみに消えてしまう。

母国で暮らした年月より、パリで過ごした歲月の方が長い私にとって、フランス語をフランス人のように話す、ということは悲願であったし、それなりの努力もした。

四十年経った今、それが見果てぬ夢であったと覚る。

一つの国の言葉には、その国の長きにわたって培われたエスプリや、可笑しみや、毒や華が複雑に宿っている。

雨風の匂いや、土の匂い、空気にひそむその国独特の気配のようなもの……それはそこに生まれ育った人のみがかぎ取ることのできる、言霊のようなものかもしれない。

ま、そんなにむづかしいことを言う前に、私が素直に脱帽しなければならぬのは、たとえば東欧の、いわゆ

る小国といわれる諸国の人々は、数カ国語をこなし、ここ十年ほど日本語の上手い若者が急増していることである。「30年の物語」という短編集の中で書いたことなのだが、もう三十七年もの昔、「人間の顔をした社会主義」を標榜してチェコに起った「プラハの春」という革命の最中に町で出逢った二人の学生の語学力に、私は息を呑んで驚いた。

「二人ともどうしてそんなに英語やフランス語がお上手なの？」

「ソ連やアメリカ、フランスや日本とも違うんです。チェコ語だけ話していればいいというには、ぼくらの国は小さくて弱いんです」

含蓄のある言葉である。時は流れ、今や目的こそちがうがアメリカ人やフランス人の中にも日本語の達者な人が増えた。その中の一人が或る政治家の演説を聴いて、「内容がまるっきりくそだった。言葉だけたくさん並べて意味がカラポ」「あ、つまり糞じゃなくて空疎。カラポじゃなくて空っぽ」と私は笑いながら訂正した。

こうした発音上の間違いは珍しくない。空疎も空想も、「くそ」になる。言葉はその意味が、ちゃんと相手に伝わったときこそ価値のあるものだから、私はうるさがられても正しい発音を教えて上げたい。私の貧弱なフランス語が少しはましなものになる手助けをしてくれる人がほしいな、と思う願いと同じである。

(女優)